法人がもつ子育て支援事業の連携と機能統合

「子育てに関する相談窓口 RIBBON 設立による包括的・多面的な相談支援の効果の検証」

〇水澤理恵[1]・宮路絵里[2]・田中愛[1]・宮路莉奈[1]・細貝由佳里[1]

（[1]きららおひさまこども園・[2]吉田福祉会）

キーワード：包括的支援　多面的支援　連携

【問題と目的】

2023 年 4 月「就学前のこどもの育ちに係る基本的な指針」が示された。多様化する子育て家庭、多様な環境の中で育つこどもに対して、支援者もさまざまな側面から子育て家庭を見守ることや、個別的な支援、多様な専門性が必要となった。伴奏型の支援が子育て支援に有効とされるが、卒園後も継続した伴奏型支援が可能な事業は利用者支援事業である。日々、母子が利用する事業は子育て支援センターである。子育て支援センターでの母子の様子やたわいない母の日常の話から支援の必要性を感じ、利用者支援事業につなげるようにしてきた。

子育て支援センター利用者は、「外に出ることや自身の子育ての悩みを発信できる母子」が多く、利用者支援事業は、「何らかの事情で、家にこもりがちであったり、悩みを表面に出しづらいという課題を抱えている可能性が高いと推測できる。

当法人のもつ「子育て相談機能」は、3 事業ある。「子育て支援センターきらら」「子育て支援センターにこにこ」「利用者支援事業きらら」である。

それぞれの事業所が個々で支援を行うよりも、3 事業が連携して、それぞれのもつ機能を統合することで、より専門性の高い支援が可能になると考えた。チームで支援することで、包括的かつ多面的な支援の提供を行うことを目的とし、2 子育て支援センターと利用者支援事業の機能を統合した「RIBBON」を結成した。「RIBBON」に込めた想いは、『様々な形　様々な強さ　様々な色を持った　子育て世帯が　地域とふんわりリボンでつながりながら、自分らしく安心して子育てができる』　そんな願いを込めている。

＜吉田福祉会　子育て支援部門の連携図＞

２，効果の検証

かかわっている職員がこの RIBBON の活動をどのように評価するか？インタビューを行った。

１）肯定的な意見

〇他の事業所との連携により、親子の変化に早期に気づくことができる。

〇他事業所の活動や支援を案内できるので、親子への援助の幅が広がった。

〇情報共有を行うことで、自分の見えている親子とは違う姿を知ることができ、理解が深まる。

〇連携により子育て支援センターが利用しやすくなり、利用者数が増加したと考えられる。
〇情報共有の中から浮かび上がった問題を、３事業所、また他の連携事業と共に援助にむすびつけることができた。
〇職員が問題をひとりで背負うことなく、チームで取り組めることが心強い。
〇親子を複数の視点でとらえられ、様々なアイデアを出し合える。
〇多方面からの情報が集まることから、子育て家庭のニーズが浮かび上がり、子育て支援イベントを開催した。
〇他事業所と連携することで、職員間に「地域を支える」という意識が出てきた。
〇RIBBON の存在は地域の子育て家庭に安心感を与えられると思う。

2）今後の課題
◎職員間で RIBBON 業務の認識の相違や、連携の行き違いがある。
◎他事業所につなげて終わりになっていないか。その後の親子の状況が把握できているか。
◎連携すべき親子の見極めが難しい。支援が必要な親子を適切につなげられているか。
◎3 つの事業所を利用する親子も多いため、支援がうるさくなっていないか気になる。
◎日々の業務に加え、仕事が大変になった。
（23 字×40 行）

【考察】
包括的な支援の提供は職員からは、１)、２)のように捉えられていた。
結成までの準備期間が短く、RIBBON の目的や機能を十分に理解できないままの出発となり、この包括的な支援を手探りで実践してきた経緯がある。
結成から１年が経過し、「親子の理解が深まった」「援助の手段が増えた」という効果、「チームで難しいケースに取り組める心強さ」や「１事業所から地域の支援へ」とうい職員意識への効果も見られた。
一方 RIBBON の活動内容の理解が職員間で統一できていない、きめ細やかな「連携」の難しさ、仕事量の多さなどの課題がある。

① RIBBON 事業の明言化（事業計画・マニュアル）
② 個々の職員の専門性とチーム力の向上
③ 効果的な「連携」方法の構築（連携シート・会議のオンライン化など）
④ 包括的で切れ目のない支援（利用者支援事業が軸となり伴走型の支援の継続）

今後はこれらの方向性を持って、この事業をより良いものにしていきたい。

今回は、支援者からの評価であった。一方で、利用者からの評価は得られていない。
上記も踏まえて、法人の子育て体制をさらによりよいものに構築していきたいと考える。